

	公表	事業所における自己評価総括表
--	----	----------------

○事業所名	KIDSクラブたわら		
○保護者評価実施期間	令和7年3月26日		令和7年4月26日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	41 (回答者数)	34
○従業者評価実施期間	令和7年4月26日		令和7年4月30日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7 (回答者数)	7
○事業者向け自己評価表作成日	令和7年5月3日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	バリアフリーかつ広い室内のデイルームで、スタッフの意見も汲みしながら、児童の要望に合わせ室内レイアウトや物品配置を変更したり、物品配置や室内掲示をしている。また、関連の学校法人内にある馬場やその周りの芝生を活用できることで、児童にとって開放感のある、自由度の高い空間を提供している。	児童の自主性や意見を尊重し、スタッフの意見も組み入れながら空間づくりを考えている。また、児童が学校や地域生活で抱える課題がKIDSクラブたわらの中で吸い出せるように、可能な限りルールを少なくして自由度を挙げて、児童の課題が表出できるよう意図して行っている。	掲示物の提示方法を見直したり、室内の物品のレイアウトを再検討するなど、現状のタイムスケジュールや物品や室内のレイアウト、自由度と統制度のバランスを見直して様々な児童が能動的に時間と空間を理解できるよう、もっと充実し明確な構造化を進めていく。自由度がある中で、スタッフ間での統一ルールを整理し、周知していく。
2	集団、個別対応ともに、多彩なプログラムを提供することで、児童に飽きさせずまた児童の興味関心を様々な方向で引き出したり、児童の多種多様な能力の発見につなげ、児童の課題だけでなく、児童のストレングスにも着目するようにしている。	スタッフ全員で毎月プログラムを提案し、毎月異なったプログラムを提供している。令和6年度後半からは、保護者に配布するプログラム表に5領域を明示して、プログラムの目的を明確にするようにしている。ホースセラピーでは、乗馬や引き馬などの活動の取り組み状況だけでなく、動物との距離感や関わり方と他者との関わり方の差異を見極めるようにしている。	現状、余暇活動的プログラムが多く、5領域の中でも偏りが見られるため、5領域をバランスよく網羅できるプログラムを作成していく。プログラムの多くが単発的であり、単発的なプログラムと継続性のあるプログラムのバランスを取るようにしていく。プログラムの目的と設定している5領域との関連性をさらに深堀していき、目的性を充実していく。
3	児童の利用状況について、保護者への連絡と説明を丁寧に行っている。連絡方法として連絡ノートと送迎時の口頭説明に加え、Eメール、電話、Zoom等で対応している。 毎月の通信で活動の様子を伝え、年1回程度、KIDSクラブたわらでの過ごす様子を写真にして、CDROMに納めて配布している。	説明時には、児童本人のことだけでなく、その周りの児童との関わりなど集団の中での様子も伝える。また、課題とその対策を伝えるだけでなく、ストレングスの部分も意識して伝えている。KIDSクラブたわらでうまくいっているかどうかではなく、児童が地域生活する一人としてどうか、成長し社会人となるにあたってどうかなど将来を見据えての説明をするように心掛けている。	現状、児童の様子を通信で発信するのが、十分でないため、もっと 生き活きとした児童の様子を発信していきたい。ストレングスの視点が弱い部分があるため、障害特性に偏らず、児童を地域での生活者の視点で、幅広い支援の方法と評価を実施していきたい。SNSの発信ではリアルタイムに活動を発信するようにしていく。

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	放課後等デイサービス計画（個別支援計画）の作成において効率的でなく、時間がかかっているところがある。計画の作成時において、スタッフ全員の意見が十分に反映されていない。そのため、計画内容の個性に欠ける面がある。作成した計画について、スタッフへの周知が十分でない。	スタッフの意見に対しての聞き取りが十分でないため、情報量の少なさが、計画作成時に選択肢を狭め、その結果作成に無駄に時間がかかる。アセスメントがインフォーマルに偏っており、十分なアセスメントでない結果、個性に欠けている。作成した計画を周知するための明確な手続きが確立しておらず、スタッフによって認識にばらつきがある。	十分でなかった個別支援計画会議やモニタリングへのスタッフの参加が以前に比べ、ある程度ルーチン化されており、その流れを十分に業務内に定着することが必要である。計画作成時にはスタッフの意見と保護者の意見をしっかりと汲み取る時間を作り、作成された計画をスタッフが周知するための業務内の流れの定着と、保護者への丁寧な説明を徹底することが必要である。アセスメントでは、VainlandⅡやSM社会生活能力検査を活用してフォーマルアセスメントを充実していくことが必要である。
2	作成されている安全計画とそれに基づくBCPや災害対策、虐待防止、防災訓練、感染症対策、送迎時の安全やそれらに関するマニュアルの内容等について、保護者への発信が不十分であった。	保護者への周知において、事業所内で公表にとどまっておらず、それも保護者が気軽に閲覧できる状況ではなかった。プログラムに防災訓練を月1回取り入れ、その内容を通信で伝えることはできていたが、内容に不十分さがあった。安全計画とその周知について、スタッフ間で認識にばらつきがあった。	マニュアル等の見直し時期を目安に、保護者が閲覧した際に理解しやすい内容にする必要がある。またマニュアル等の閲覧がしやすいように配置すると共に、要点について保護者に配布する必要がある。スタッフ間においても、義務化されている内容であること、児童福祉の視点で安全対策を徹底する必要があることを再認識する必要がある。
3	家族交流の場を設定できておらず、家族のための研修会の事業所での開催、実施地域にある家族会との連携が十分でない。地域の児童クラブや地域の他の子どもとの交流の機会をほとんど設けられていない。未就学児や卒業した児童が利用する施設との連携がほとんどできていない。	関連の学校法人主催のイベントで交流の機会を設ける程度で、事業所単体での家族交流の場や研修会が設定できていない。利用する児童との関わりで児童クラブとの連携はあるものの、そこに通う児童との交流は設けられていない。移行支援に重要な児童発達支援センターや保育所、障害者施設や企業との連携がほとんどできていない。	事業所単体として、家族交流会や懇談会、利用児のための保護者見学会などを設定し、家族の交流の機会を設定する必要がある。保護者や近隣の住民に対し、療育や育児、学校生活に関連する研修会を開催して、研修会の機会の設定と地域交流の機会を設定する必要がある。地域の公園に遊びに行く、図書館など地域の施設を利用するなどの交流に加えて、児童クラブとの交流の機会を設定する必要がある。移行支援に関連する連携すべき機関に、事業所として能動的に関わっていくことが必要である。